様式C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22年　6月　15日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2009
課題番号：207304 51
研究課題名（和文）　心理臨床における効果的な事例検討の方法とは？－事例検討の方法に関する研究
研究課題名（英文）　Which Case Conference is Effective in Clinical Psychology?: A Study of methods of Case Conferences:

研究代表者
三澤　文紀（MISAWA FUMINORI）
茨城キリスト教大学文学部・講師
研究者番号：00438607

研究成果の概要（和文）：本研究は、心理的援助の専門家（特に新人）の研鑽手段である「事例検討」の検討を目的とした。特に、家族療法の一技法である「リフレクティング・プロセス（RP）」の応用を中心に検討した。この結果、援助場面での困難を抱える事例発表者は、検討後に否定的感情の低下が他の検討方法と同様に見られただけでなく、RPではより多くの有益なアイディアを得ていた。また、RPにはアイディア産出を促進する仕組みがあることも明らかとされ、RPの有効性が示された。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this study was to examine the style of “case conferences”, which were used for training (especially, new) experts in psychological support. Particularly, application of the REFLECTING PROCESS (RP) which is one of the methods of family therapy was focused in this study. The following results were found: In the RP-style conference, the presenters who were new experts and had trouble in their support work reported decrease in their negative emotion as same as in the Free Discussion style conference. Also, they gained a larger number of beneficial and/or available ideas in the RP-style than in the Free Discussion style. Furthermore, it was showen that RP had some mechanisms to advance the production of ideas. These results revealed effectiveness of the RP-style conference.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：(1)事例検討の方法　(2)リフレクティング・プロセス　(3)リフレクティング・チーム　(4) 検討のコミュニケーション　(5) 家族療法　(6) 事例検討の効果

１．研究開始当初の背景

心の健康が重視される中、心理的援助を行う臨床心理の専門家（以下、臨床家）の社会的重要性が増し、臨床家自身の心理的負担増大が懸念されていた。当然、「臨床家を支える」ことが重要となる。加えて、臨床家の多くは経験の浅い点も懸念されていた。

従来、臨床家は、同じ臨床家や関連分野の専門家ら共に、困難な事例について検討する「事例検討（ケース検討、ケース・カンファレスとも呼ぶ）」を行ってきた。この事例検討は、専門家としての資質向上の方法として、また臨床家同士が困難を一人で抱えずに支え合うため方法としても、有効であることが経験的に知られていた。しかし、事例検討の効果を実証的に検討し、方法の改善を図る研究がほとんど見あたらなかった。当然、事例検討の主役である事例発表者に焦点を当てた研究に関しても、皆無に等しかった。

このため、事例検討に関する研究、特に事例発表者の視点からみた事例検討の効果に関する研究を行うことが必要と考えられた。

２．研究の目的

本研究の目的は、「リフレクティング・プロセス（RP）」とその他の事例検討の方法に関して、その効果の検討とされた。特に、RP が事例検討の方法として効果的であるかについて、詳細に検討することとされた。また、この検討を通じて事例検討の改善と新しい方法の開発することも試みることとした。

３．研究の方法

（1）事例検討の効果に関する研究

被験者：心理臨床活動の経験がある若手臨床家 11 名。被験者は、事例検討会で事例発表者（以下、発表者）の役割を担い、事例や心理臨床活動上の困難について発表した。

参加者：臨床心理士指定校の大学院生と終了 5 年以内の臨床家、のべ 44 名。

条件：以下の 2 つの条件を設定する。

- **自由検討条件（G 条件）**：発表者が事例の概要について説明し、その後、参加者 4 名と共に自由に討論を行った。比較的一般的と考えられる検討形式である（図 1）。
- **リフレクティング条件（R 条件）**：参加者から 1 名の「面接者」を選び、他の参加者 3 名が「チーム」を構成した。そして、「面接（面接者が発表者と事例について話し、それをチームは脇で静かに観察する。）」と、「チームの討議（チームが約 10 分間、面接について話し、それを面接者と発表者は脇で静かに観察する。）」を繰り返し実施した。RP を応用した検討形式である（図 2）。

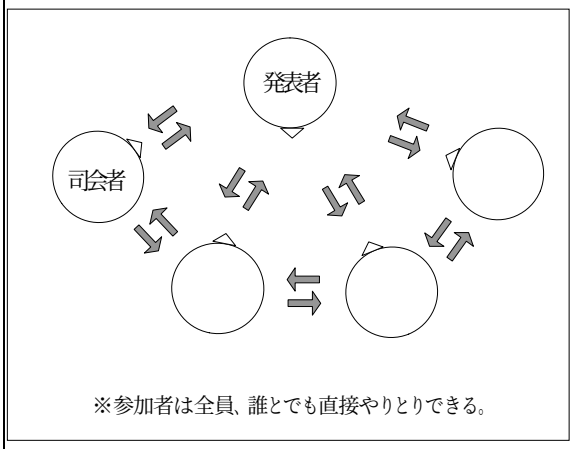

図 1　自由検討形式

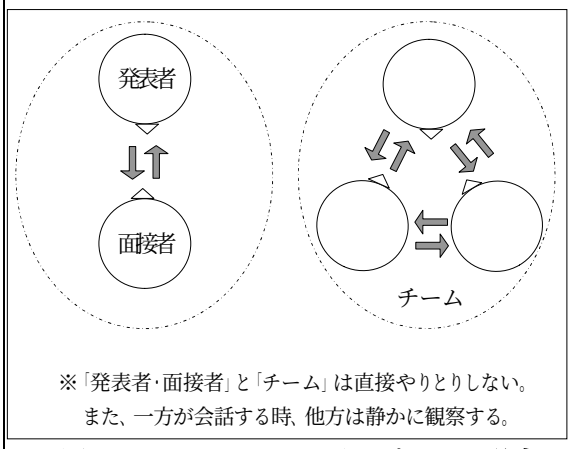

図 2　リフレクティング・プロセス形式

手続き：被験者は各条件のケース検討会（参加者は同一）に 1 回ずつ参加して発表した。その際、心理尺度を用いて情緒的変化・自己効力感・満足度を測定した。また各検討会直後、得たアイディアの記述を発表者に求め、そのアイディアの詳細や着想プロセスに関するインタヴューを実施した。

（2）RP のメカニズムに関する研究

①チームの討議に関する研究

被験者：大学生・大学院生の知人同士 3 名 1 組とする 12 組 36 名。

条件：以下の 2 つの条件を設定した。

- **均衡条件**：実験者のみが詳細を知っている内容に関して、被験者は最初に説明を受け、その後 3 名全員で話し合った。RP 形式に近似した条件である。
- **不均衡条件**：1 名が熟知している内容につ

いて、それを知らない他の２名に説明し、その後それについて全員で話し合った。自由検討形式に近似した条件である。

手続き：総ての組が、均衡・不均衡の両方を経験し、その会話の模様は録画され、トピック数、同時発話、言い換えや補足、質問数などが測定された。条件施行順はカウンターバランスが図られた。

②発表者の着想プロセスに関する研究

手続き：「(1) 事例検討の効果に関する研究」のインタヴューでの被験者の発言を逐語録化した。その後、着想プロセスに関する発言を中心に研究の意図を知らない臨床心理士１名と合議により、各発言の逐語録に関する分類を試みた。

４．研究成果

(1) 事例検討の効果に関して

両条件とも、事例検討後に発表者（被験者）の不安や抑うつ等の否定的感情の低減が見られ、心理面接での自己効力感の増加が見られた。このことから、経験的に効果的と語られてきた事例検討について、特に感情面等への効果が明らかにされた。

また、RP 形式の事例検討（リフレクティング条件）では、発表者が得たアイディア数が自由に話し合う形式（自由検討条件）より多く、有益かつ活用可能と発表者が判断したアイディアの数に限っても多かった（図 3)。このことから、RP 形式の事例検討では、困難な事例等に対処するためのアイディアを得る場合により効果的であることが明らかにされた。

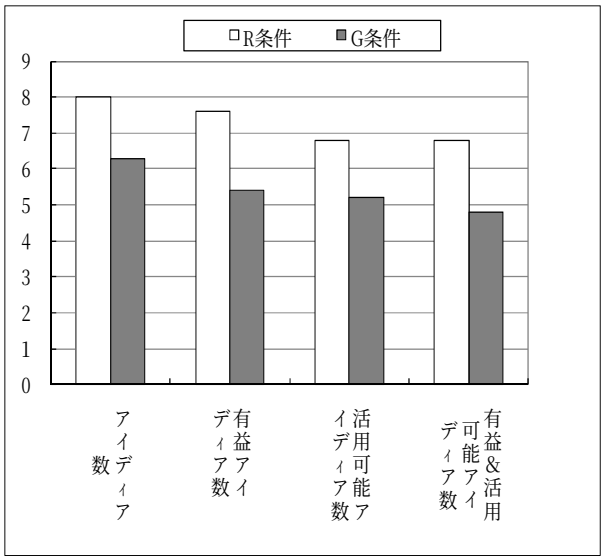

図 3　両条件のアイディア数

(2) RP のメカニズムに関して

①チームの討議に関して

各参加者の保有する情報量に偏りがある「不均衡条件」では、質問とその回答のパターンが多く、補足したり発言中に割りこんだりといった自由に発言できる会話が展開しにくいことが明らかとなった。そして、トピック総数が比較的少なく、しかも互いに内容的な関連が薄いトピックが多いことが明らかになった。このため、参加者の誰かが発言して、情報を多く保有する人が答えることで次のトピックに移行することが比較的多いと考えられる。

逆に、参加者の情報量がほぼ等しい「均衡条件」では、特定の人への質問やその回答といったパターンが少なく、参加者全員が自由に発言可能な会話が展開していることが明らかになった。トピック総数も多く、しかも直前のトピックと関連するトピックが多いことが明らかとなった。

RP では情報量を多く保有する人物（発表者）と直接会話できないが、それによりチームメンバー同士で情報量が均衡化されている。この結果、１つのトピックに皆が参加可能な自由な相互作用が展開しているといえる。このような会話では、トピック産出が増大し、しかも１つのテーマをめぐって微妙にテーマが変化する会話が生じやすくなると考えられる。このようなチームの討議が、それを聞いている発表者に多様な視点を提供し、アイディア着想に肯定的影響を与えていると考えられる。

②発表者の着想プロセスに関して

発表者の「着想プロセス（どのようにアイディアを思いついたか)」に関して、発表者の発言を元に分類した。その結果、参加者の発言が強く影響して着想した「Ⅰ．発言中心」、参加者の発言をヒントにしつつもそこから別のことを考えて着想した「Ⅱ．発言プラスα」、そしてごく僅か（全体の 2.9%）ではあるが参加者の発言との関連無しで自発的に思いついた「Ⅲ．自発」の３つのカテゴリーが見いだされた。さらに、Ⅰの下位カテゴリーとして参加者の発言をそのまま取り入れた「①直接群」、参加者の発言の内容の延長線上で考えを進めた「②発展群」、Ⅱの下位カテゴリーとして参加者の発言内容から脱線して別の内容を考えた「③飛躍群」、参加者の発言から過去の自分のアイディアを再確認した「④想起群」が見いだされた。

この中で、参加者の発言の影響がみられるカテゴリーⅠとⅡを中心にその数を検討したところ、G 条件では「②発展群」が、R 条件では「③飛躍群」と「④想起群」が期待値より多く見られた（表 1)。

このことから、参加者と直接やりとりを行う自由検討形式に比べ、RP 形式では発表者が参加者の発言にとらわれず、全く別のことを

考えたり、自分の過去のアイディアを思い出したりするなど、比較的自由に考えを進めていることが明らかになった。このような違いにより、発表者が RP 形式でより多くの有意義なアイディアを着想することに繋がると考えられる。

表１　カテゴリー別の数

		G 条件	R 条件	計
Ⅰ発言	①直接群	27	27	54
中心	期待度数	23.5	30.5	54
	②発展群	35*	30*	65
	期待度数	28.3	36.7	65
Ⅱ発言	③飛躍群	3*	14*	17
プラスα	期待度数	7.4	9.6	17
	④想起群	9*	25*	34
	期待度数	14.8	19.2	34
	計	74	96	

註）$\chi^2_{(3)}=12.39$　$p<.01$

* $p<.05$（期待値との比較、調整済残差による）

（3）本研究全体に関して

研究全体から、事例検討は、その主役である発表者に肯定的影響をもたらすことが明らかにされた。発表者の否定的感情に関しては、RP 形式と自由検討形式でともに同様の低減が見られた。また、面接運営に関する自己効力感もともに増加した。これらから、事例検討には感情面等での効果があると言える。

加えて、RP 形式の優れた特徴として、発表者のアイディアを多く得られることが明らかとなった。これには、参加者（チーム）がより多くのトピックを話すこと、発表者は目の前で繰り広げられる話し合いとは別のことを考えることも含めて自由に考えを進めることが可能であることなどの RP の特徴が関係していると考えられる。つまり、RP には発表者の考えを促進する仕組みが備わっており、それがアイディア産出の多さに繋がっていると考えられる。

研究開始当初、RP と他の方法を組み合わせた新しい事例検討の方法を開発することを企図していた。しかし、今回の結果を見る限り、むしろ使い分ける方が適切と考えられる。たとえば、初学者同士が集まる事例検討会では、RP 形式が推薦される。参加者の発言内容の範囲を超えた多くの、しかも有益で実践に活用できるアイディアを発表者が得られるためである。その一方で、指導者から特定の考え方や技法を学ぶための事例検討では RP は適していないと考えられる。それは、RP では指導者の発言内容から脱線して考えを進めることが多いと予想されためである。従って、各形式の特徴を踏まえて使い分けることが望ましいと結論づけられる。

今後の課題としては、より広い文脈での検討が考えられる。本研究では新人臨床家を対象としたが、その他の臨床家や他職種の専門家を含めた事例検討における効果を検証する必要がある。また、RP がアイディア産出を促進する仕組みを備えていることから、事例検討に限らず、幅広い領域の「小集団討論場面」での応用が期待できる。これらについての検討も重要と考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 三澤文紀、板倉憲政、長谷川啓三、リフレクティング・プロセスの応用に関する研究：新人臨床家同士によるケース検討へのリフレクティング・プロセスの応用、家族療法研究、査読有、26 巻 1 号、2009、65-73

② 三澤文紀、リフレクティング・プロセスのコミュニケーションに関する研究②：情報の均衡・不均衡がチームのコミュニケーションに与える影響、茨城キリスト教大学紀要、査読無、43 号 2009、191-200

〔学会発表〕（計 3 件）

① 三澤文紀、リフレクティング・プロセスのチームのコミュニケーションに関する研究：情報保有の均衡・不均衡がチーム内コミュニケーションに与える影響、日本家族心理学会第 26 回大会、2009 年 8 月 23 日、大阪市立大学

② 三澤文紀、リフレクティング・プロセスの基礎研究－「新しい臨床面接方法」の研究例として－（自主シンポジウム「リフレクティング・プロセスの質的研究、質的研究のリフレクティング・プロセス－その私論に向けて－」の話題提供として）、日本質的心理学会第 6 回大会、2009 年 9 月 13 日、北海学園大学

③ 三澤文紀、リフレクティング・プロセスのアイディア着想に関する研究－リフレクティング・プロセス形式のケース検討におけるケース発表者を中心に、日本家族研究・家族療法学会第 27 回福島大会、2010 年 6 月 4 日、ビックパレットふくしま

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等　該当無し

６．研究組織
(1)研究代表者
三澤　文紀（MISAWA FUMINORI）
茨城キリスト教大学文学部・講師
研究者番号：00438607

(2)研究分担者
該当無し

(3)連携研究者
該当無し